

警 報 新 聞

刊 夕 日 二 月 四

發行兼編輯人 川崎文治
印刷所 警報新聞社
電話 五五五

邊渡藥局

調方處 調劑藥料品

三町下
邊渡政五郎
(向局便郵)

一册の代金で
御希望通りな
五册の雑誌が
自由に読める

平町長橋町三五
川崎回文庫
(市込次第規則書進呈)

松村病院

平町南町電話一〇七番

内科・外科・耳鼻科
咽喉科・花柳病科
高久病院
平町田町電話五二三番

内科・胃腸科・婦人科
十二指腸虫病科
花柳病科・X光線科

國産品の愛用(二)

博覽會開催に際し
平町民諸君に告ぐ
萬岳 大人

かくの如き傾向が國民全体に浸潤するならば重大で今日より國民は先づ自己を顧み帝國の國際的地位を考慮し亡國的思想を未然に防遏することは國民として當然の務めであると思ふ然らば國民が育目的の所謂舶來品を好む國産品は粗悪なりとして一概に貶すと云ふ傳統的の弊風自ら匡正せられ國産品を理解し之れを愛用するに至るであらう一方生

家庭教育玩具

新案特許出願
第一七七八番



各學校幼稚園實地應用の結果賞賛を博し感謝狀を賜はる

文明人の子供は最も文明の玩具を喜ぶ

發行所 平町白銀町十番地
郷土社
(電話二六七番呼)

セールとモスリン着尺

最新流行の柄は
御待して居ります

四月一日ヨリ同月七日マデ

セル大特價 九圓五十錢
モス着尺同 五圓五十錢

中野呉服店

電話六十七番

郷土社編 四月十日五千部發行
新案平町案内誌 附
平町市街圖、汽車時間表
平町有名商家紹介

定價 三六版三十二頁美裝
内 一部 金十錢

平町沿革、位置、地勢及境界、戶數及人口、町勢經濟、町名字、市街美、思想と生活、當國の問題、平町例年祭、二大花節、娛樂場、公園及遊覽地、物産、交通官公署、學校、神社寺院、教會及病院、銀行會社工場社會事業、文化上の機關、名所舊蹟奇蹟、郷土の先人石城みやげ、磐城史料目錄、磐城民話、平町近郊名所道しるべ

産者側としても所謂粗製濫造の悪名を蒙らざる様に注意すべきである我國も最早學問も發達し智識も進んで來たので優良な製品も出來て居る、決して價値に於ても品質に於ても外國に劣らぬものが多くある、外國品が極めて廉價であるとか或は優良であるとか云ふ場合は別として同等のものであるならば是非國産品を愛用せねばならぬ、愛用することには畢竟するに外國に金を持つて行かれぬ事になるのである富増進の見地よりして誠に意義あるものである今日の我財界を立直さんとするに貿易の不公平を調和即ち

丸登式店

平町田町 電話三三三番
川添房二郎

輸入を減じて輸出を増さねばならぬ輸入を少くするには必要不可欠からざるものにして内地に生産しないもの、外は總て國産品を使用することにしなればならぬ尤も吾人は外國品を排斥するが如き意志を有するものではないが唯愛國的精神の發露に依つて誤れる習慣を匡正して公平なる態度を以て批判し事情の許す限り内地品を愛用し國内産業の發達を圖らねばならぬ

和久井

漆器指物 器漆屋

平町一丁目 電話四〇五番

銘格 拂込 時價	磐城銀行	五〇〇	五三〇
	平銀行	五〇〇	六八〇
	同 新	五〇〇	四三〇
	磐城銀行	一一五	一〇五
	磐城銀行	五〇〇	四二〇
	磐城銀行	三〇〇	二八〇
	田村實業	一一五	一一五
	四倉銀行	一七五	一七五
	農工銀行	二〇〇	二五〇
	同 新	一五〇	一九〇
	同 新	五〇〇	五二五
	同 新	一一五	一四五
	七七銀行	一一五	九八
	同 新	五〇〇	四七〇
	同 新	二五〇	三二五
	只見川電	一一五	七五
	植田水電	一一五	一六五
	二本松電	一一五	一五〇
	磐城製菓	一一五	六〇
	同 新	二〇〇	二五
	平信託	五〇〇	二〇〇
	磐城勸業	一一五	一三五
	植田物産	三〇〇	二六五
	平製水	二五〇	一八〇
	好間軌道	五〇〇	二五〇
	入山新	三三五	一七〇
	小田炭礦	二五〇	七〇
	同 新	五〇〇	四一〇
	同 新	二二五	一八〇
	同 新	五〇〇	六三五
	同 新	三三〇	四三〇
	平運送	一一五	六五

電話に金融致し

株式買中値

猫イラズを呑み

三名が折重つて絶命

林の中から物凄いうめき聲 添へて逃げられぬを悲観す 互ひに妻あり夫ある身

一日午後七時頃四倉、久之濱兩隣間の横内山林内に物凄き呻き聲のする處から不審を抱いた通行人が山林内を燈火にてすかし見たる處 歳若い

男女が

幼兒を中に 互に手を取り合つて苦悶し 居たる爲め吃驚し直ちに此 旨四倉分署に急報せるより 宿直の丹野巡査が渡邊、門 馬の兩醫師と共に現場に出 張せる頃は既に三名共絶命 し居たが取調への結果男は 四倉町本町猪狩菊松三男榮 太郎(一)女は平町鍛冶町宮 田銀治屋同居人、半澤スィ (三)及びその長男實(二)に て榮太郎とスィは

茨城縣

多賀郡秋山 炭礦にて稼業中懇ろな仲と なつたが男には妻子あり女 には郷里耶麻郡猪苗代町に 亭主ある身の爲め添へて遂げ られぬを悲観して世を果敢 ならみ自殺の意を決し三人共 に猫イラズを嚙下自殺した ものであると

選挙人名簿

調製の苦心

夜うち朝がけ の状態而努力 平町會議員選挙人名簿は愈

納税組合は 相互の爲め

種々の利便

平町には現在八十九個の税 税組合あり尙逐年増加の傾 向にあるが之を十二年中の 実績に徴するに組合員千八 百九十六人にして

全町の 戸數割納税

者四千四百七十四人に對し その四割二分を占め加入率 に於て成績頗る良好なるも のあるのみならずその徴收 金額三十三万五千七十五圓 の巨額に達し各組合の租税

その他 公課十五萬 八千四百三十三圓八十錢を控

五郎を引致目下署内に於て 取調中

四倉消防檢閲

石城 郡四倉署管内消防組は七日 午前九時から岡町海岸にて 聯合檢閲を執行すると

發電所計畫の 變更書類愈々提出

伏見井上兩氏出縣

大瀧發電所の計畫を斷念し 第一次計劃の工事に變更す べき書類は昨日全部完成小 田吉次氏の調印済みとなり 縣知事に回送したが何れに もせよ平町は更らに町とし ての遺漏なき方法を構じて 置く必要があるのて来る五 日伏見町長は井上縣議と共に 出縣する事となつた

平窪村長 選

木田源一氏に

石城郡平窪村々長豫選會は 一日午後一時から平町丸新 館にて開會、松本與平氏を 座長に推し満場一致を以つ て木田源一氏を推薦すべく 決し松本七兵衛氏外三名が 交渉委員となり木田氏に會



入學後の變化(下)

また精神上の變化と申しま すと凡てが規律正しい生活 に入るので、一般がよい習

優良納税表彰

石城 郡窪田村にては二日午前十 時開村役場にて、警備村に ては同じく役場にて夫々優 良納税組合並びに善行者表 彰式を舉行すると

溝渠の掃除

大工町の試み

平町字大工町の溝渠は泥土 や汚物等が停留し水流不完 全の爲め多少降雨あれば直 ちに汎濫して床下に浸水し 衛生上甚だ寒心に耐えぬと 云ふので佐藤衛生區長は消 防組に依頼し時々水道の水 を溝渠に流して掃除する事 となつた由

勿体振つて オレは刑事だ

拘留言渡さる

平町南白銀町坂本半五郎方 慣を得るやうになります、 現に學校へ入つたらうちの 子供は生れ變つた等と申し ますがこれは學校へ行つた 著しい特長で智育と共に徳 育は益々小さい者に伸びて 行きます。子供は野中の一 本杉のやうに心身の健全が 一番大切でありますから家 庭と學校が協力一致して、

募集

文藝其他投稿 募集します

にて五圓札一枚▲同一丁 目飯田一氏は聚樂館にて 廿七日黒の中折帽一個 を夫々拾得し此程平署に 届出たと

砂で埋まる 縣の急施工事

石城郡小名濱町漁港修築工 事は大正七年より起工し三 月を以て第一期工事を完了 し同地方に於ける漁業振興 上に資するところ少くない が第一防波堤工事の爲め潮 流の關係から第二防波堤と 埋立岩壁との間なる船付場 が砂で埋まり漁船が船付場 に進行することが出来ず折 角完成したる漁港も利用さ れない現状にあるので地方

高久信用組織

石城 郡高久村信用購買組合は二 日午後一時から同村小學校 に於て發會式を舉げた

特別大興行



勸博 記念 特別大興行 劇 死の渦巻 全六卷 本年一月特別映演 不如婦浪子 全五 卷 四月三 日 演 共話 子 芳 田 川 元 十 口 諸 △ 演 共話 子 芳 田 川 元 十 口 諸 △

日差替